

## 「複面相」

喜多川 雅人

「じーじ 大丈夫？」、孫の拓也から、前のめり気味に歩く拓磨の背中越しに心配そうな声が掛かった。

三月終わりのある日、朝十時半すぎのことである。杖を頼りによるよろしている「じーじ」を慰めに、世田谷は弦巻にある長男宅からシモキタのじーじ宅まで、自転車で訪れてくれたのだ。

一月に八十四歳の誕生日を迎えた北山拓磨は、体力保持のため、朝の散歩を欠かさない。洗面、朝食、トイレ、新聞……、一連の朝の行事が終わると、雨が降っていないかぎり毎日、シモキタにある自宅を起点に、マイペースでゆっくりと小一時間散歩するのだ。

ふらつく拓磨を案じて、いつもだと四歳年下の連れ合い・佐知子が後方から付き添うことになっているが、今日は少し風邪気味というので、知らせを受けた長男が、春休み中の孫を「ヘルパー」として派遣してくれたのだ。ヘルパーさんにはじーじから幾ばくかのお小遣いが出るのが暗黙の了解になっている。

1

自宅から五分先の街中に下り、小田急線の地下化に伴い地上の空き地に造られた下北沢駅を基点とする直線の緩やかな坂道を新宿方面へ上ると、十分足らずで東北沢駅に到着する。そこから左に折れ、井の頭道路の大山町交差点をよぎって、京王線の笹塚に向かった。

笹塚では、駅の手前にある紀伊国屋に寄り、新書を漁り一冊求めると、いつもの帰り道を辿る。途中で、玉川上水に繋がる細い川沿いで休憩して、涸れ沢に近い細い水の流れに動くものがないかジーっと見つめる。魚はいないが、たまに青蛙が遊んでいるのを見付けるのが嬉しいのだ。

「今日は何もないね」と、拓也。拓磨が無言で頷き、帰路を辿った。

軽い疲れを覚えたので、持て余し気味の孫の了解をもらって、水路から繋がる散歩道に並ぶベンチで休憩。十五分ごとに休むペースだ。

所属する年寄りのペンクラブで、最近詠んだ川柳二句を思い出して思わず苦笑い。

兼題「飛ぶ」で拓磨が詠んだ二句は、

「噂飛ぶ 昔転勤 今介護」、「飛び跳ねる 孫を追いかけ 杖をひく」

後者は、飛び跳ねていた小さな孫が、心身ともすっかり大きくなって介護役になった現状を詠んだものだが、うら悲しさが受けなかったのか、票は今一つ集まらなかった。

二人ともマスクを着けている。コロナ防備だ。外に出れば、行き交う誰もがそうだ。

最近では、白い医療用に替えて、色違いのマスクがお洒落の一つになっている印象さえある。黒、青、グリーンなど…、色物が増えて、上下の衣装とコーディネートしているのだ。日本の国会では、議員さんたちは圧倒的に白が多い印象だが、テレビで観たアメリカのバイデン大統領はブルーのマスクを着けて格好良かった。

ふと見れば、介護役の孫が着けているのもブルー系だ。

「拓也、君はマスクを何種類持っている？」と、じーじ。

「三種類かな。学校では白か薄いブルーだけど、遊びのときは黒に替えたりして…」と、拓也。背丈ではじーじを少しだけ追い越して、一八〇cmになったという。

負けてはいられない。明日にでもシモキタで色違いを手に入れよう。白に加えて、薄いイエロー、ブルー、グリーン、それに黒だ。服の上下もそれらに合わせねばなるまい。

衣装箱で寝ているジャケットなどを取り出して、マスクとコーディネートする仕事ができた。ボケ防止だ。

もっとも最近では、出かける前に、服のコーディネートを考えながら、水は持ったか？携帯は？時計は？エトセトラとアテンションが散ると、知らぬうちに混乱してしまうことがあるようになった。

なんとか散歩を終えると、介護代を貰ってご機嫌の孫は、軽くハグを交わして戻っていった。商社勤めで海外生活がながい長男一家では、二人の孫たちは幼い頃から今に至るも、別れの挨拶はハグと決まっているのだ。拓磨も、日本人としては、平均身長を上回る瘦躯長身だが、伸び盛りの孫たちは、既にじーじを少しだけ追い越している。こちらは逆転で毎年縮んでいくのだから悲しい。すでに体格で勝る彼らからのハグは、人前だと照れ臭い感じもするが、いつまでも嬉しい。

それから間もなく、ある朝のことである。散歩に出かけると、ぼくが数メートルあとからついてきた。介護役だ。十分は歩いたころだろうか、大きな交差点の信号待ちで合流すると、拓磨を見上げた佐知子が叫んだ。

「あらいやだ、マスクを二枚着けているわよ！一枚外すのを忘れたのじゃない？大丈夫かしら…？」「最近なにかとそうなのだからと…」と、顔をしかめながらくどい。

そういわれて口元を探ると、口廻りを青色のマスクで覆っているのに加えて、顎の下に白いのが一枚張り付いているではないか。

「本当だ、いやだね、まったく。この間もスーパールのレジで売り子さんからそれとなく教えて貰ったことがあったな…」と、苦笑いしながら拓磨。

白いのを取り外し、背中のバッグを開けて、それ用の収納袋に入れると、そこには色違いのマスクが十枚ほどぎっしり詰まっていた。

いよいよ始まったのかもしれない。(完)